

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

ウィトゲンシュタインの後期哲学についての研究
— 確実性について —

氏 名

橋本 哲

論 文 内 容 の 要 旨

ウィトゲンシュタイン（1889～1951年）が晩年に関心を持った問題の一つに確実さに関するものがあつた。それは『確実性の問題』（*ON Certainty*）という草稿の形で残されている。

『確実性の問題』においてウィトゲンシュタインは、G.E.ムーアの1925年の論文「常識の擁護（‘A Defence of Common Sense’，以下「擁護」と表示する。）」と1939年の論文「外的世界の証明（‘Proof of an External World’，以下「証明」と表示する。）」に対する批判を通じて、「知識（知っている）」、「疑い」、「誤り」、「確実さ（確実である）」等の語の用法及びそれに係る言語ゲームの基盤について考察している。

本論文は、これらの関係を素描することを通じてウィトゲンシュタインが明らかにしようとした「確実さ」について研究するものである。

論者の主張を先取りして言えば、「知識」、「疑い」、「誤り」等の用語は通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で意味をなすが、これらの用語は「擁護」に掲げられているような確実さを表わす命題に用いることは論理的な意味でできないというものである。

「確実さ」は、通常の言語ゲームを支える基礎にある「揺るぎないもの」で、「知識」等とはカテゴリーを異にする。「揺るぎないもの」は一つの体系を形成しており、通常の言語ゲームの中で規則のような役割を果たしている。言語ゲーム全体は、この「揺るぎないもの」とそれを基礎とする通常の言語ゲームという二層の構造からなっており、この「揺るぎないもの」を疑ったり誤ったりすることは、自己論駁に陥ることが免れず、言語ゲームを破棄するものとなる。このように「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲームの二層の関係から生まれる論理的なものである。そして、「揺るぎないもの」自体には根拠がなく、それは行為する態度、構えの内に示されており、それを言葉によって表現することは意味をなさない。

本論文では、このことを明らかにするために、最初に第1章では、ウィトゲンシュ

タインの後期哲学の基本的な概念の中で、本論文に関係するものをあらかじめ整理しておく。

第2章では、最初に、ウィトゲンシュタインが確実性について関心を持つきっかけになったムーアの「証明」について、その概要を明らかにする。その後、ムーアの「証明」に対するウィトゲンシュタインの批判と評価について、アヴラム・ストロールの *Moore and Wittgenstein on Certainty* を基に、ストロールによるウィトゲンシュタインの確実性についての解釈を検討する。彼は、「揺るぎないもの」を「蝶番命題」と呼び、蝶番命題の身分は「文法的規則」であって、知識は言語ゲームに属し、蝶番命題は言語ゲームの外にあって言語ゲームを支持する、蝶番命題の確実性は、本能、行為、訓練と言う三つの形式を持つ、と論じる。

第3章では、『確実性の問題』の中で取り上げられる「確実さ」が、通常の言語ゲームの中で用いられる「知識」、「疑い」、「誤り」等の用語とどういう関係にあるのか、また、ウィトゲンシュタインが明らかにしようとしている「確実さ（揺るぎないもの）」がどういう確実さなのか、彼のテキストを基にして浮かび上がらせていく。そこでは、ウィトゲンシュタインの言う確実さが、心理的なものとか主観的なものではなく、言語ゲームの二層の構造—「揺るぎないもの（確実さ）」とそれを基礎とする通常の言語ゲーム—に基づく論理的なものであることが示唆される。

第4章では、ウィトゲンシュタインが明らかにしようとしている「確実さ（揺るぎないもの）」について、その確実さをどう理解するか、マリー・マッギンの *Sense and Certainty*、モイサル・シャロックの *Understanding Wittgenstein's On Certainty*、アンディ・ハミルトンの *Wittgenstein and On certainty* を基に、3人の解釈をそれぞれ検討して、彼らの解釈について批判と評価をする。

マッギンは、「揺るぎないもの」を「ムーア型命題」と名付け、ムーア型命題は認識的文脈の中では使われない、ムーア型命題は我々の「実践の枠組み」であり、「言語の表現を有意味に用いるための条件」であるとした。そして彼女は、ムーア型命題の確実さは、我々が言語による記述の技術を訓練によって習得した結果であると論じる。

シャロックは、「揺るぎないもの」を「蝶番」と表現して、蝶番には疑いの余地は無く、蝶番に対する疑いや誤りは論理的に不可能である、蝶番は探究の規則であり、言語ゲームの外にあって言語ゲームを可能にする、蝶番の確実さを獲得するには、自然に吸収・取り込まれる仕方と、教育や訓練による仕方の二つの仕方がある、と論じる。

ハミルトンは、ムーアが擁護に掲げた「揺るぎないもの」を「ムーア命題」と表現して、知識は疑いや誤りの論理的可能性を含意するが、ムーア命題に疑いや誤りの論理的可能性はなく、それは言語ゲームや実践の前提を表現している、と論じる。

第5章では、ウィトゲンシュタインのテキストを基に言語ゲームの二層の構造を明らかにするとともに、心的状態としての「確実さ」について、論者の見解を論じる。

また、「確実さ」に関連する「規則」、「根拠と原因」について、ウィトゲンシュタインの考え方を論じる。

第 6 章では、第 5 章まで論じてきた「確実性」についての論者の解釈を基礎にして、P.F.ストローソンの *Scepticism and Naturalism : Some Varieties* を基に、懐疑論に対するストローソンの自然主義を批判する。ストローソンは、ヒュームとともにウィトゲンシュタインを自然主義と見ることによって懐疑論を避けようとするのであるが、彼の提唱する自然主義的方法からは、ウィトゲンシュタインの確実性の内実は導かれないことを論じる。

第 7 章では、本論文で取り上げた 5 人の解釈について、それぞれの見解をまとめるとともに、論者の見解を比較して論じる。

本論文を通じて示そうとする論者の見解は、教育や訓練などは確実さを獲得する原因であって、確実さの内実を説明するものではない、「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲームの二層の構造からもたらされる論理的な関係に基づくものであるということ、即ち、「揺るぎないもの」を疑うことや誤ることは、自己論駁に陥ることが免れず、言語ゲームを破棄する結果になるということ、そして、心的状態としての「揺るぎないもの」は、感覚や感情のような本物の持続を持たず、ウィトゲンシュタインの言う心的傾性であり、それは行為する我々の態度、構えの内に示される、というものである。

